

熊野古道伊勢路第 10 回
『観音は世に連れ、世は
観音に連れる観音道』

平安末期から江戸時代にかけて、地上の罪を詫び、極楽浄土を願う観音信仰が盛んになった。しかし西国 33ヶ所を参ることができないので、近場で霊場が全国あちこちに造られた。この熊野にも麓の清泰寺から約 26



0m の頂上にある清水寺（せいすいじ）までの約 1k の山道の脇に 33 体の観音石像が造られた。ただ現在では清泰寺に一番から 4 番まで安置されているので、私達は世界遺産の標識から登り始めると早速 5 番から 15 番までの観音様が優しいお顔でお迎えしてくれた。観音様の命日にはお寿司や

おはぎが売られ、地元の人で賑わったらしい。今の天神さんが屋台に出るようなものでしょう。巡礼者も南側の山道より北側のこの観音道を通る事も多かつたらしい。

頂上にあつたという清水寺の由緒は坂上田村麻呂のお母さんが京都清水寺（田村麻呂が創建したとも）に信仰篤く、我が子の武運長久を願ひ、この地に寺を寄進したが、同じ名では怖れ

多く、「せいすいじ」と称したと語り部は話される。坂上田村麻呂と熊野のつながりは如何とは話されない。伝説を追求しないのがツア一客のマナーとしておこう。現在残念な事に清水寺はなく、奇岩と石仏、戦時中の戦勝祈願の舞姫の大きな石碑が残り、茶屋がお弁当に使ったか、その名残にバランや花ミョウガの株が残っている。明治に入つて、日露戦争や第二次大戦に到るまで戦勝と無事生還を願う人達で賑わつたが、戦後すつかり人気をなくし、寂れていた。しかし平成 5・6 年世界遺産登録頃より人の訪れを取り戻してきた。猪垣も延々と続く。1日米 5 合の農閑期の大切な公共事業で早くても遅くても不可

楽しい年賀状

あけましておめでとうございます。

新年を向かえ年賀状で振り返ってみました。私はこれまで何十年もこんな形で年賀状を作ってきました。その一部をご紹介します。読み返していると、その時分のことが思い出されて感慨無量です。あたらしいことに挑戦しよう

と決心して始めたパソコンはまだまだ判らないことばかりし行錯誤の繰り返しです。余るときは ヘルプおっかなびつくりのメールも届いた喜びは一入できるだけ人生を楽しみながらとしを重ねたいと思っています。しろをむかないで



F・M

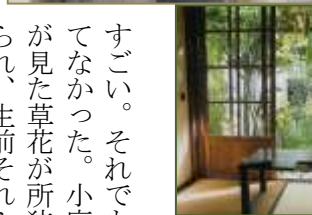
(ただたくさんあります。槻輪HPでご覧ください。)

東京下町ぶらある記

『正岡子規庵・中村不折(ふせつ)書道博物館界隈』

東京山手線周辺には江戸の名残りの屋敷跡、名所旧跡や公共施設が山ほどある。大名や家来の敷地が広がったので、維新以降転用された由縁である。その周辺が庶民の生活地帯となり、下町風情が残っているのであらう。実に多くの人が庶民生活を楽しんでいる。

まずは山手線鶯谷駅から歩くこと 5 分、駅の反対に行けば上野公園のある地域であるが、書道博物館を探すつもりが、普通の狭い路地を歩いてみると、普通の門構えの表札に、子規庵保存会、と書いてある。こんな所に子規の終焉の地となつた庵があるとは思つてもみ



なかつたので、驚いた。書道博物館はさておき、早速入つて見る。俳句に素人の私でも知っている正岡子規の一生は NHK ドラマ『坂の上の雲』でさらに関心があつた。明治維新の動乱時

に生き、明治 35 年 9 月、34 歳 11 ヶ月、この家で没した。短い一生の間に短歌・俳句の近代化に勉め、自身新聞記者でもあり、多くの文人、俳人、画家、歌人などと幅広く交流し、文学全般に素晴らしい業績を残した。まさにこの八畳二間に寝床を置き、錚々たる文人が集い、句会をした様子も絵に残されている。(現在国会図書館に保存)

結核性カリエスで曲がらなくなつた足の膝が邪魔しないように四角く切り込んだ。だ机も痛々しい。玄関の硝子戸に子規の食欲を示す献立が並べられているが、量と品数はすごい。それでも病魔に勝てなかつた。小庭には子規が見た草花が所狭しと植えられ、生前それらを眺め沢山の俳句や短歌を詠み、空を見、社会をみていたのだらう。

次に斜め向かいの書道博物館に入ると、この地を終生の住処とした中村不折と子規が蜜接な関係にあつた事にまた驚いた。明治 28 年子規が日清戦争の従軍新聞記者として遼東半島に赴任した際、中村が画家として同行したり、新聞にイラスト挿絵を子規の勧めで描き、採用され、その後当たり前私達は新聞に挿絵を見る事になつたと云う。中村画伯はその後フランスに 4 年間留学し、絵画を本格的に勉強し作品を残した。それ以上に中国を中心にした漢字の歴史を研究し、石碑・墓標・青銅器・書道文具など他にないような貴重な物品の収集に努め、彼自身の絵画・書道作品と共にこの博物館に展示されている。私には書道関係や絵画は良かったが、中国の古い物品は地味で理解出来なかつた。この 1 日は新幹線品川駅から始まって、浜松町でのスマートなビジネスマンを見て、この鶯谷の庶民っぽい大衆食堂で昼食のあと、100m も付き添つて近道を教えてくれる店員さんにこの街の親しみを感じた。大阪のおばちゃんにはやはりこの方が性に合っている。

S・U